

チベット族の村に住む漢族の一妻多夫婚 ——香格里拉県N郷x村¹の事例をもとに——

六鹿 桂子

1. 問題提起

チベット族の婚姻形態の一つである一妻多夫婚 (polyandry) とは、複数 (2人以上) の夫たちと 1 人の妻によって形成される婚姻形態である。中華人民共和国の初めての婚姻法は 1950 年に制定された。その後 1980 年に婚姻法は改正され²、2001 年の新婚姻法においても基本的には同じで、一夫一婦婚が原則であるが、現状ではその限りではない。それは、チベット族にとって一妻多夫婚とは古い悪習と考える一方で、家族が一致団結すると賞賛する声も少なくないからである。それについては、次のことに由来する。チベット族は父方系譜を骨 (リュウイパ、リュパ、リュパ・チク)、母方系譜を肉 (シャ、シャ・チク) とか血 (タ) と呼び、父方すなわち骨が同じである兄弟姉妹は団結が強く、その兄弟が一生一緒に暮らすことはこの上ない幸せであると考えられてきた。それは兄弟が一緒に暮らすことで、結束が強まるとの理由からである。また同じ父の血を受け継いだ兄弟が一緒に暮らすことの利点として、チベット族の財産分与の方法も関わってくる。チベット族は兄弟が均等に財産を分ける均分相続をする。一般的に分けるものは、土地・家畜の他に家にある生活用品にまでおよぶ。チベット族が生活する地域は標高が高く、土地も肥沃でないので、農作物が多く収穫できることは望めない。そのような状況でもともと広くない土地をさらに息子たちに分け与えてしまえば、生産物が減ってしまうため、生活を維持することは不可能である。以上の点から、一妻多夫婚をすることで、財産や土地の分割を阻止し、分家によって減少する労働力の分散を防ぐことで、生活が維持できる。さらに、兄弟が分業 (牧畜や商業など) をおこなうのに妻を共有し同居することで、兄弟のどちらかが牧畜や商売などで長期間家を留守にしているとしても、兄弟のもう片方が必ず家に残って守ることができるので都合がよく、経済的にも豊かになる。その上、兄弟が共同で妻を娶ることで、婚資 (結婚費用) の支払いが少なくて済む。兄弟がそれぞれ妻を娶った場合、妻同士の

諍いが起こりやすいので、このような争いを防ぐためなどが挙げられる。また妻の側からすれば、兄弟の共通の妻となった女性は、夫間の分け隔てをせず、家計を切り盛りすることから良き妻との代名詞がつくのも事実である。一妻多夫婚がおこなわれる理由は、このようなことからであって、一妻多夫婚が存在する村の人々にとってこのような結婚はすべきではないという考え方が少ないために、現在に至っても一妻多夫婚は黙認されている。

そこで、中国雲南省迪慶チベット族自治州香格里拉県 N 郷 x 村に存在する 2 組の兄弟型一妻多夫婚（兄弟が 1 人の女性を共通の妻として結婚する）をしている夫婦を事例に挙げ、1 組がチベット族であり、もう 1 組は漢族である状況から、チベット族の婚姻形態の一つである一妻多夫婚を漢族の夫婦がおこなっている点に注目して、チベット族の村で他の村民と全く同じ生活を営んでいる漢族がどのような理由から一妻多夫婚という婚姻形態をとったのかについて考察を試みる。

本稿で提起したい点は、上述のように、x 村には一妻多夫婚という婚姻形態をおこなっている夫婦が存在しており、その夫婦は一妻多夫婚という形態をとってはいるものの、実は一妻多夫婚をおこなう本来の目的とはかけ離れており、このような婚姻形態をとる本当の目的が別にあるということである。さらにいうならば、このような婚姻形態は法律では認められていないので、合法的な結婚としては制度化されることはない。しかしながらこのような婚姻形態をとっている夫婦の周りの村民が理解を示すことで、継続することができると同時に、一妻多夫婚が存在し続けられる状況があるということである。

以下では、x 村に存在している一妻多夫婚の事例からその形成要因について考察する。

2. 一妻多夫婚の概念および x 村の中に存在する一妻多夫婚

チベット族の一妻多夫婚には、夫たちが兄弟同士で 1 人の妻と結婚する兄弟型一妻多夫婚（兄弟共妻）、夫たちが父と息子である場合の、父子型一妻多夫婚（父子共妻）、夫たちが親しい友人同士である場合の、友人型一妻多夫婚（友人共妻）と、稀な例ではあるが夫たちが叔父と甥の場合もある。大部分が 2 人以上の兄弟で、それも年の開きのあまり大きくない 2 人から 4 人兄弟で 1 人の妻を娶る兄弟型一妻多夫婚である。上述の友人型一妻多夫婚以外は、すべて夫たちは親族関係であるが、この友人型一妻多夫婚の夫たちは親族関係になくても、

実の兄弟のように非常に仲の良い関係にある場合である。

一妻多夫婚の結婚式は、長兄と妻となる女性を中心におこなわれ、その他の夫となる弟（たち）も式に参加するか、あるいは夫となる兄弟が揃って妻と共に結婚式を挙げる。夫婦の子どもはすべて長兄である夫の子どもとしてあつかい、その長兄である夫に対して「父」と呼び、その他の夫に対しては「叔父」と呼ぶ。また長兄である夫から弟（夫の片方）へと順番に、生まれてきた子どもを平等に割り振り、子どもたちは夫たちに対して「父」と呼ぶ場合もある。

x 村に存在する 2 組の一妻多夫婚夫婦は、どちらも夫が 2 人兄弟である兄弟型一妻多夫婚をしている。1 組はチベット族の夫婦であって、もう 1 組は夫婦とも漢族である。この漢族の夫婦は親の代からこの x 村と妻の親は x 村の隣の村である y 村に住みついて、子どもを産んでいるので、この一妻多夫婚をした夫婦の夫たちは x 村で、妻は y 村で生まれ育っていることになる。従って、生まれながらにしてチベット族の村で生活しており、生活習慣もチベット族と全く同じであり、言語は北京語を話せるものの、通常はチベット語で会話をしている。宗教もチベット仏教を深く信仰している。名前は漢族名を持っはいるが、普通はチベット族名で生活をしている。一見したところチベット族と変わらないため、漢族であるとは思わない。このように本来は漢族でありながらチベット族の社会の中に完全にとけ込み、他のチベット族と同様な生活を営み、村の行事にも他の村民と同様に参加しているなどから考えて、この漢族の夫婦が一妻多夫婚をしていても不思議ではないのかもしれない。そこで、この漢族の夫婦ともう 1 組の夫婦について、一妻多夫婚をおこなっている理由を、以下の事例分析で明らかにしていきたい。

3. x 村および村民の概況

雲南省迪慶チベット族自治州香格里拉県 N 郷には 4 つの行政村があり、その中で西北部に位置する X 行政村に 15 の自然村が属している。その 1 つが x 村である。x 村は香格里拉県の中心から国道 214 号を徳欽県方向へ 65 km 行ったところに位置し、村は国道沿いにある。

x 村は 2002 年の時点で、総人口 260 人（男 129 人、女 131 人、男女比率＝100：101.55）、村全体で 40 戸、平均家族数は 6.5 人と比較的多く、それに伴って 1 戸あたりの平均土地保有数も 1950 m²と多い。村は直系家族の割合が多く、全体の 75%を占める。世代別では三世代が全体の半分以上で、夫方居住が 45%に達

している。夫婦総数は 64 組で、その中で一妻多夫婚夫婦は 2 組のみである。村民はチベット族の他に、人数は確定することができないが数十人の漢族と 1 人のナシ族からなる。チベット族以外の村民もチベット名で暮らし、チベット語を話し、チベット仏教を信仰して、村の政治的活動や宗教的行事にも積極的に参加している。

(表 1-1)

村	総人口	男女数	男女比率	総世帯数	平均家族数	平均土地保有数
x 村	260 人	男 129 人女 131 人	100:101.55	40 戸	6.5 人	1950 m ²

(表 1-2)

家族形態の戸数と割合				世代別戸数と割合			居住別戸数と割合		
村	核家族	直系家族	その他	二世代	三世代	四世代	夫方居住	妻方居住	新居住
x 村	9 戸 22.5%	30 戸 75%	1 戸	11 戸 27.5%	21 戸 52.5%	8 戸 20%	19 戸 47.5%	10 戸 25%	9 戸 22.5%

(注) 居住別戸数と割合には、夫方・妻方・新居住に含まれないその他の家庭が 2 戸ある。

(表 1-3)

村	夫婦総数	一夫一婦婚	一夫多妻婚	一妻多夫婚 ³
x 村	64 組	62 組(96.9%)	0 組	2 組(3.1%)

(出所) 2002 年 5 月の調査による。

x村の主な生業は、トラックによる運送業を中心に、農業・商業・手工業・採取業などの総合発展によるものである。これによりx村はN郷にある 47 自然村の中で一人あたりの平均年収が一番高く、1999 年には 3009.1 元（約 45000 円）であった（高発元 2001: 63-64、雲南省中甸県地方志編纂委員会 1997: 448-449）。土地はx村では村民平均一人あたり 0.45 畝（約 300 m²）が分配されている⁴。主な農作物は小麦・チンクー（裸麦）・トウモロコシで、これらの収穫物はほとんどの家庭で自家消費している。この村の主な経済林は、黄果（ミカンによく似

た柑橘類)やクルミで、これらは市場に出している。

4. x村に存在する一妻多夫婚の事例

x村には2002年4月の時点で、2組の一妻多夫婚夫婦が存在している。この2組の他に以前一妻多夫婚をしていて、その妻と夫の一人が亡くなって、片方の夫のみが健在である家庭も1戸ある。村民の話によれば、1949年(解放)以前に一妻多夫婚のような婚姻形態はあったかもしれないが、多くはなかったということである。今後一妻多夫婚をするであろう村民もないことから考えると、x村では、もともと一妻多夫婚がおこなわれていたとはいえない。むしろ一妻多夫婚をしなければならないような要因があつて、現在存在しているのではないかと考えられる。その上、姉妹型一夫多妻婚⁵については、以前1組の一夫多妻婚があつたが、2002年4月時点ですでに離婚をし、妻である姉妹のうち妹が自分の産んだ子どもを連れて家を出て、現在x村内に住んでいる。残った姉と夫が一夫一婦婚をして、一夫多妻婚から一夫一婦婚へと変化したのである。ここで姉妹型一夫多妻婚について触れた理由は、一妻多夫婚が以前からおこなわれてきたか否かを明確にしたいためである。すなわち、親の世代で姉妹型一夫多妻婚をおこなっていて、夫婦関係が良好であったときに、息子たちの世代で兄弟型一妻多夫婚をさせることは比較的よくあることなので、逆にx村のように一妻多夫婚も少なく、また姉妹型一夫多妻婚もあまりおこなわれてきていないという点から考えてみると、やはりこの村では以前から一妻多夫婚がおこなわれてきたとはいえない。

以下で、2組の一妻多夫婚の事例を考察し、その存在理由を考えてみたい。

[事例1] R家の場合。女性70歳

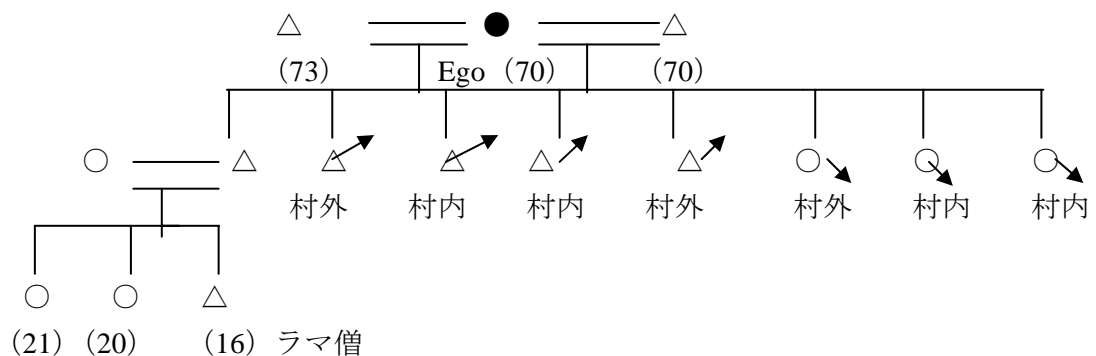
この女性はx村の隣の村であるy村の出身である。隣の村といっても歩いて数分の距離にある。以前はx村とy村は1つの村で、いつ頃から2つの村に分離したかは定かではないが、この女性が夫たちのもとへ嫁いできたときには同じ村であつた可能性はある⁶。この女性は漢族である。漢族名も持っているが、通常はチベット族名を使っている。北京語も話すことができるが、日常的にはチベット語を使用している。この女性は1947年頃に2人兄弟と一妻多夫婚をした。その夫たちも漢族である。彼らの父親は紅軍⁷の軍人としてこの地にやって来て戦争終結後もそのまま残った。母親も家族と共に1935年頃にy村に来て住み

着いたという。この女性は 13 歳の時に母親が亡くなり、15 歳で夫たちのもとに嫁いできた。この結婚は親が決めた結婚であった。このような婚姻形態をおこなった理由は、弟の方の夫が先天性に耳が不自由であったので、一般的な結婚ができないことを心配した夫たちの両親が兄弟で共通の妻を娶って、一妻多夫婚をするよう望んだのである。

兄の方の夫は木椀製作を主な仕事とし、家事や農作業の手伝いもしている。弟は主に農作業をおこなっている。この女性の長男は村の外へ商売をしに行っており、長男の娘であるこの女性の孫娘（21 歳）は農作業を手伝っている。

R 家の収入は長男の商売で得る収入と、孫娘の松茸採取⁸で得られる、2～300 円（3000～4500 円）である。この家では 2 畝（約 1333 m²）余りの土地を保有しており、栽培される農作物はすべて自家消費し、市場には出していない。家畜も牛とブタを飼っているが、これらも自家消費されるだけである。2002 年の時点で、R 家はこの女性とその 2 人の夫たちと、この夫婦の長男とその妻、そして長男の 2 人の娘と息子の三世代 8 人家族である。

16. R 家



（図 1）R 家の家族構成

（出所）2002 年 5 月の調査による。

（注）（図 1）R 家の家族構成図において R 家の前についている 16 と（図 2）の B 家の 35 という数字は、参照資料 x 村の村民状況の表内の村民番号である。

〔凡例〕 △；男性 ○；女性 =；結婚 —；兄弟姉妹 ()；年齢
 △↗；婿入り ○↘；婚出

〔事例 2〕B 家の場合。女性 49 歳

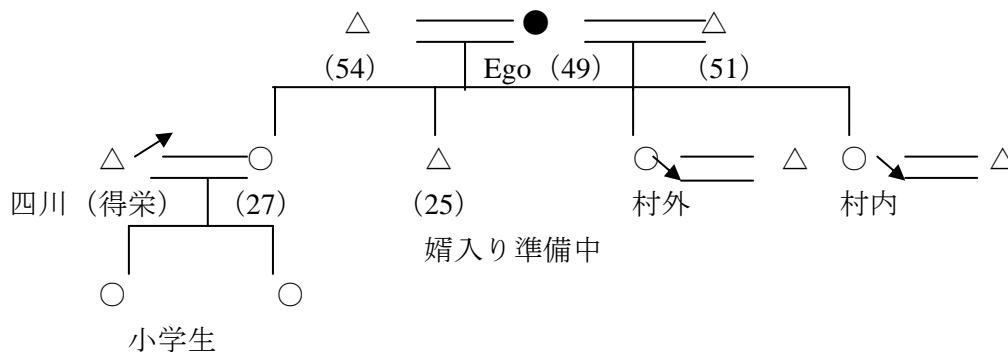
この女性もやはり y 村の出身であるが、彼女はチベット族である。この女性

は 1975 年にチベット族の 2 人の兄弟と結婚をした。この夫婦の場合、最初兄の方の夫とこの女性 2 人は共に働いていた道路工事の現場で知り合い恋愛をした。早くに両親を亡くした女性に兄の方の夫が結婚をしようと告げた。その後、自分の弟に対して一緒に 1 人の女性と結婚しようと一妻多夫婚をすることを勧めた。弟も兄の申し出に同意した。弟は先天的に耳が不自由で、兄弟仲が非常に良かった兄はそのことを気につけ、自分とともに一妻多夫婚をするように勧めたのであった。

兄の方の夫は 1979 年に昆明で車の修理工として働きに行っていたが、1 年で戻ってきた。その後 1991～1994 年にラサで金を加工する職人として働いていた。身体をこわして以来、現在では主に家事をおこなっている。商売をしていたときには 3～4 ヶ月で 4000 元の収入があったという。長い期間家を留守にしているても安心であったのは、もう 1 人の夫である弟が家を守ってくれたからである。現在では長女の婿が運送業をおこなっていて、その収入が 5、6 万元（75 万～90 万円）あるという。農作業は弟の方の夫と妻がおこなっている。この家は松茸採取には行っていない。

B 家では 2.7 畝（約 1800 m²）の土地を保有している。農作物は小麦・チンクー（裸麦）・トウモロコシで、野菜の栽培もしているが、すべて自家消費している。家畜は牛 3 頭（乳牛を含む）・耕作用の牛 2 頭・ブタ 4 頭を飼っている。B 家は 2002 年の時点で、この女性とその 2 人の夫たち、この夫婦の長女とその夫、長女夫婦の 2 人の娘たちそして Ego の独身の長男が同居している、三世代の 8 人家族である。

35. B 家



(図 2) B 家の家族構成

以上のように、x 村に存在する一妻多夫婚の事例によれば、どちらの夫婦も

夫の片方（弟）が先天的に耳が不自由であり、一生涯結婚ができない弟を心配した両親あるいは兄が、健常者の兄（自分）とともに共通の妻を娶ることで、結婚生活を営むことができるとし、一妻多夫婚をおこなったのである。すなわち、この2組の一妻多夫婚夫婦は将来の生活に不安のある身障者がいるということが要因となって、このような婚姻形態をとったので、この要因がなければ、この2組の夫婦は一妻多夫婚をしていなかった可能性が高い。

x村の一妻多夫婚が夫たち（兄弟）の片方に障害があることが要因となって形成されている点は、一妻多夫婚が比較的多くおこなわれている徳欽県の村々（六鹿 2008：162-167）の一般的な兄弟型一妻多夫婚とは異なる。徳欽県は香格里拉県の隣の県であり、徳欽県にあるその村々は、国道214号をx村から20km足らず徳欽県の中心（ラサ方面）方向へ行ったところにある。その地域の一妻多夫婚は、x村と同じく夫たちは兄弟であるが、全員が健常者であって、身体的な障害を持つ弟の将来を懸念してとられている婚姻形態ではない。徳欽県の村々の一妻多夫婚夫婦は夫たちである兄弟が分業をしていて、片方の夫が牧畜や商売、あるいは出稼ぎで家を長期間留守にするが、家にはもう片方の夫がいるので安心して村の外へ出て行って働ける。あるいは経済的に貧しく、兄弟それぞれにお嫁さんを娶らせることができない。また親の世代で兄弟型一妻多夫婚や姉妹型一夫多妻婚をしており、親たちはこのような結婚をしてよかったと考え、息子たちにも一妻多夫婚をさせて、労働力を増やしたいなどが一妻多夫婚を形成する理由として挙げられる。この点から、x村に存在している一妻多夫婚は、徳欽県の村々の一妻多夫婚とは異なっていることがわかる。

5. x村の一妻多夫婚と「招夫養夫」との比較

x村の2組の一妻多夫婚夫婦は、兄弟の片方（弟）の夫が先天的に耳に障害があったため、結婚ができないと将来の生活を懸念し、妻を共同で娶るという婚姻形態をおこなったわけである。その2組は一方は漢族で、一方はチベット族であったことから、漢族がチベット族の婚姻形態の一つである一妻多夫婚をしていたことは着目に値する。しかしながら、漢族の婚姻形態の中には一妻多夫婚の一種であるといわれる「招夫養夫」がある。そこでx村の漢族の一妻多夫婚夫婦は、チベット族の婚姻形態というよりは、漢族の以前おこなわれていた婚姻形態を踏襲し、「招夫養夫」をしたのではないかという疑問が生じる。そこで、「招夫養夫」という婚姻形態について簡単な説明を加えたうえで、x村の

一妻多夫婚との比較を試みよう。

「招夫養夫」は婿を取る漢族一つの方法として、かつて山西省岢嵐県、福建省光沢・霞浦屏南、湖北省竹山・潜江・京山・郧県、陝西省沔県・鶏県と甘肅省全体でおこなわれていた。このような婚姻形態をおこなう理由は、「多くの場合すでに結婚している夫に身体的な障害が出た場合や年をとって体力的に衰えたので、経済生活を担っていくことができないため、新たに別の男性を夫として迎え入れ、その夫と夫婦関係を結ぶことで、家の経済を援助してもらうので、新たな夫を“幫夫”とか、“幫腿”（両方とも「手伝う人」という意味）と呼ぶ」（堅賛才旦 2000：9）

というものである。従って、「招夫養夫」は、もともとは一夫一婦婚であったものが、新しい夫を迎えて、その新たな夫にもとからいる夫の生活も含め、家計を援助してもらう婚姻形態のことである。この場合、古い夫と新しい夫は必ずしも兄弟とは限らない。このように「招夫養夫」は、一夫一婦婚が数年後一妻多夫婚へと変化したものであり、当初からの一妻多夫婚ではない。x村の場合は、夫の身体的な障害による夫側の事情によってこのような婚姻形態をとったのに対し、「招夫養夫」は家庭を維持するための経済的援助を受けたいという妻側の事情によって、結果的に一妻多夫婚を形成することになるのである。

以上の点から、x村に存在する漢族の一妻多夫婚と「招夫養夫」を比較してみると、x村の一妻多夫婚は最初から兄弟で1人の妻と結婚しており、途中から一妻多夫婚になったわけではない¹⁰。すなわち、一夫一婦婚から変化して一妻多夫婚になった「招夫養夫」とは異なる。また形成要因からx村の一妻多夫婚夫婦は夫側の事情によるものであり、それに対し「招夫養夫」は妻側の事情によることから、x村の一妻多夫婚は「招夫養夫」と同じではないといえる。

x村の漢族の一妻多夫婚夫婦は片方の夫に身体的な障害があることから、その夫の将来の生活を思いやっておこなっているという意味で、身体的な障害が形成要因となっているのであり、「招夫養夫」も夫が男として経済的に家を支えていく能力がなくなったという理由で一種の「身体的な障害」として捉えられているという点では、全くの別物とはいいい難い点も残る。しかしながら、x村の一妻多夫婚夫婦は結婚当初から一妻多夫婚を形成しており、「招夫養夫」のようにもともと一夫一婦婚であったが、その後もう1人の男性と結婚して一妻多夫婚となったというのは、結果的には一妻多夫婚を形成したことになるとはい

え、似て非なるものという観点は否めない。よって、x 村の一妻多夫婚は漢族の「招夫養夫」という婚姻形態というよりは、むしろチベット族の一妻多夫婚と考えてよいのではないであろうか。

6. 事例分析

x 村の 2 組の事例において注目し値する点は、身障者の将来の生活を心配しその解決策として、チベット族の婚姻形態の一つである一妻多夫婚をとりいれたことや、またチベット族の村で暮らす漢族の夫婦が、上述の要因からこのような婚姻形態をとっていることである。x 村の一妻多夫婚夫婦のように、夫である兄弟のどちらかが身障者で、そのために一般的な結婚ができないということであれば、その障害を持った人は一生実家から分家することなく、兄弟の世話を受けて暮らしていくことになる。健常者である兄弟の片方からすれば、共に暮らしていくので、自分とその妻の結婚生活に障害を持った兄弟も加えて一緒に生活していこうという気持ちがあって、3 人で結婚したものと考えられる。

一般的には一妻多夫婚は兄弟それぞれが結婚し分家することから生ずる財産や土地の分割を防ぎ、労働力を減少させないようにするためにおこなわれる結婚の形態であって、x 村の一妻多夫婚のように身体に障害のある兄弟が結婚できるようにするためのものではない。しかしながら、x 村では男女 1 対 1 で結婚することが難しい身障者でも、一妻多夫婚によって結婚することができるという一つの救済手段として考えられているのである。

さらには、x 村で暮らす漢族の夫婦が一妻多夫婚という婚姻形態をとっていることについて、チベット族の一妻多夫婚であるのか、あるいは上述した漢族の婚姻形態である「招夫養夫」であるというべきかという点に関して、チベット族の一妻多夫婚と「招夫養夫」とでは、その形成方法がまったく異なる。前者は、兄弟型であれば結婚する当事者である兄弟と妻とが最初から一緒に結婚する。あるいは、兄弟のうち弟の年齢が若すぎる場合、その弟は結婚できる年齢になって、兄たちの結婚生活に加わることはあるが、この場合は弟の年齢的問題が作用している。それに比べて、「招夫養夫」はもともと一夫一婦婚であったのが、夫に身体的な障害が生じた場合や年老いて働けないなど家計を支えることができなくなったので、妻は新たな夫を探し、2 番目の夫に家の経済を負担してもらうために、その夫とも結婚をするものである。これによって、一夫一婦婚から一妻多夫婚へと変化したものである。この概念から x 村の漢族の一

妻多夫婚は、確かに身障者の弟を兄と妻の結婚生活へ加えていることから、一見すると「招夫養夫」に近いもののように思えるが、x 村の場合兄と弟が妻と一緒に結婚しており、結婚当初から一妻多夫婚を形成している。さらにいうならば、x 村の漢族夫婦は「招夫養夫」のようにもともととの夫に障害が生じて、新たな夫を探したのではない。この点から考えると、x 村の漢族夫婦がおこなっている一妻多夫婚は、明らかに「招夫養夫」とは違って、チベット族の一妻多夫婚であると考えられる。

x 村では、以前から一妻多夫婚が盛んにおこなわれていたわけではなく、また村に存在する 2 組ともが同じ理由からこのような婚姻形態をとっており、一般的な一妻多夫婚の形成からみても特殊なものである。x 村の地理的位置から考えると、よその村の村民と頻繁な交流があることから、他の村から知り得たこのような婚姻形態をもとに x 村の 2 組の夫婦の状況から形成した一妻多夫婚であるといえる。

その上、x 村の 2 組の一妻多夫婚夫婦は、年齢的にみて、漢族の R 家の方が、チベット族の B 家よりも早く結婚している。おそらく同じ状況下にあった R 家の夫婦を参考に B 家も同じように一妻多夫婚を選んだ可能性はある。従って、同じように兄弟の中に身障者がいた場合に、今後一妻多夫婚が新たに形成されることは大いに考えられる。

またその要因は、漢族がチベット族の村で暮らし、チベット族の社会に完全にとけ込んでいながら、その反面で親がそうであったからとの理由で、死後はチベット族の忌み嫌う土葬⁹を望み、すでに棺桶すら用意しているという状況にあっても、一妻多夫婚をしたという結果なのである。

7. おわりに

本稿では、x 村に存在する 2 組の一妻多夫婚夫婦の事例をもとに、このチベット族の村で暮らしている漢族の夫婦が、チベット族の婚姻形態の一つである兄弟型一妻多夫婚をしている要因について考察を試みた。漢族の夫婦の他に、もう 1 組はチベット族の夫婦が一妻多夫婚をしているのであるが、この 2 組は同じ理由からこのような婚姻形態をとっていたのである。この夫婦の夫たちの片方（弟）に先天的な身体障害があり、結婚をすることは難しいと懸念し、一生実家で生活するのであれば、健常者である夫（兄）とその妻の結婚に加えることで、障害を持った弟も結婚生活が送れるとの理由から、一妻多夫婚をした

のである。このように一妻多夫婚が何らかの理由で結婚のできない人を救済する方法として用いられていることは、チベット族の一妻多夫婚が比較的多い徳欽県の村々のその本来の理由からすれば逸脱しているものである。すなわち、徳欽県の村々における一妻多夫婚夫婦の夫たちは、健常者であり、兄弟がそれぞれ結婚し分家することで、財産や土地の分割や労働力の減少を防ぐ目的で、このような結婚がおこなわれているのであって、x 村の一妻多夫婚夫婦にみられた要因はない。また、x 村では以前から一妻多夫婚が多いわけではなく、たまたまこの 2 組が全く同じ理由からこのような結婚をしたことは、x 村の地理的位置から考えて、他の村の村民との交流から一妻多夫婚がよその村でおこなわれていることを知り、この婚姻形態を用いて、身体障害者に結婚ができる機会を与えたものである。従って、一妻多夫婚が多くおこなわれている地域での一般的な形成理由からすれば、x 村の一妻多夫婚は特殊な事例であるといつてよい。

さらには、チベット族の村である x 村に暮らす漢族の一妻多夫婚に着目した。漢族ではあるが、チベット族の村で生まれ育ち生活し、生活面でも、言語の上でも、また宗教的にもチベット族と全く変わらない生活を営み、チベット族の村に完全にとけ込んで生活している。彼らは、自分たちの親が亡くなったときに土葬をおこなったので、漢族の死後の埋葬方法である土葬を希望していると一面を残しつつも、一妻多夫婚をしている。そこで、この結婚は漢族の婚姻形態である「招夫養夫」であって、チベット族の一妻多夫婚ではないのではないかという疑問が出てきた。そこで x 村の漢族の一妻多夫婚と漢族の婚姻形態である「招夫養夫」との比較分析をおこなってみた。この「招夫養夫」という婚姻形態は、もともと結婚していた夫に身体的な障害が出た場合や、あるいは年老いて体力的に家の経済を担うことができなくなったなどのために、新たに別の男性を夫として迎えて、この 2 番目の夫に経済的に援助してもらうもので、婚姻形成の段階で x 村の漢族の一妻多夫婚とは明らかに異なることがわかった。すなわち、x 村の漢族は結婚当初から夫である兄弟たちと 1 人の妻が結婚しているが、「招夫養夫」は最初一夫一婦婚であったものが、一妻多夫婚へ変化したものである。さらには、前者が、身障者（弟）の将来の生活のためという夫側の事情によるものであるのに対し、後者は、家計を支えることができなくなった夫に代わって、経済的に困窮している家計の援助をしてもらうためという妻側の事情によるものである。以上の点から x 村で暮らす漢族の一妻多夫婚はチ

ベット族の一妻多夫婚であると考えられる。

今後は一妻多夫婚の事例を考察する上で、x 村に存在した一妻多夫婚のような特殊な理由による婚姻形成についても注目する必要がある。なぜならば、一妻多夫婚が身障者に結婚することができる機会を与えるという意味で、一種の救済措置の働きをしていることから、今後もこのような形で一妻多夫婚は存続しうる可能性があるからである。

注

- 1 調査をおこなった村の具体的な地名を示すと、村および村民が特定されてしまうため、人権保護の点から配慮し、実際の地名を示す代わりに、調査対象となった自然村が置かれている郷の名称をアルファベットの太文字で、またその自然村の名称を小文字で示す。
- 2 1950 年に制定された婚姻法では、男女共に婚姻の自由・一夫一婦婚・男女の権利の平等・女性と子どもたちの合法的な利益を守ることが述べられている。改正された 1980 年の婚姻法は、1950 年の婚姻法で定められた条項の内容とほぼ同じで、内容に続けて、親が決めた婚姻、売買婚や婚姻の自由を干渉する行為の禁止を定めている。そして、1980 年の婚姻法の第一章第三条で初めて重婚の禁止、及び配偶者を有する者が他人と同居することの禁止を定めている。これにより一夫一婦婚の原則がより詳しく定められたことになる。2001 年の新婚姻法は、1980 年の婚姻法で定められた内容とほぼ同じである。
- 3 一妻多夫婚をしている夫婦 2 組とも夫方居住である。
- 4 土地の分配については、子どもと老人は成人の半分の面積が分配される。
- 5 チベット族の婚姻形態には、一夫一婦婚と一妻多夫婚のほかに一夫多妻婚 (polygamy) もある。チベット族の一夫多妻婚はほとんどの場合が 2 人以上の姉妹で 1 人の男性と結婚する (姐妹共夫) ののであるが、稀に母と実の娘が 1 人の男性と結婚する場合 (母女共夫) がある。このようにチベット族の一夫多妻婚における妻たちは、ほとんどの場合親族関係にある。姉妹型一夫多妻婚をする理由は、親からすれば、娘たちを嫁がせず、1 人の婿養子をとって、その男性と娘たちを結婚させるのであるが、その背景には、娘たちそれぞれに婿をとらせる経済力がなく、かつ労働力の減少を防ぐためでもある。娘たちからは、姉妹の仲が非常に良く、離ればなれになりたくない場合に、姉妹が揃って 1 人の男性に嫁いだりするが、なかには外面的な問題や身体的な障害を抱えた姉 (あるいは妹) を健常者である妹 (あるいは姉) と一緒に嫁がせて (あるいは婿養子をもらって添わせる)、問題や障害があることで夫や嫁ぎ先の家族からいじめを受けることから守ってあげられるという理由もある。また、姉妹型一夫多妻婚をしたほとんどの姉妹が、姉妹と 1 人の男性が同時に結婚するのであるが、初め姉と 1 人の男性が結婚して、姉に子どもができなかったため、その後、妹が子孫を残すため、姉と姉の夫との結婚に加わり、一夫多妻婚を形成することもある。

- 6 R 家の一妻多夫婚をしている夫たちの母親は、その一妻多夫婚の妻（この女性・Ego）と同様に x 村の隣の村 y 村の出身であった。この点から、y 村には夫たちの母方の親類がいて、その関係から夫たちの妻であるこの女性を花嫁としてみつけてきた可能性が大いにある。さらに、村民の話によれば、x 村と y 村はもともと 1 つの村であったので、夫たちの母親が夫たちの父親のところへ嫁いできた時代にはまだ同一の村であったことが考えられる。そうであれば、夫たちの両親は村内婚であったことになる。このことが息子たち（一妻多夫婚の夫たち）の結婚にどのような影響を与えるかという、2 つのことが考えられる。1 つには、一妻多夫婚の妻である Ego が夫たちのところへ嫁いできた時点で x 村と y 村がまだ同一村であった場合は村内婚であって、夫たちもこの女性も同じ村の村民なので以前からよく知っていて結婚したわけである。もう 1 つは、Ego が夫たちのもとへ嫁いできた時点ですでに村が分離しており、y 村から嫁いできたという場合である。この場合であっても x 村と y 村との関係は、以前同一村であったことから村民同士の関係も密接で、ほぼ村内婚のような結婚であったであろうし、夫たちの母親の出身地でもあり、その母親の親類を通して Ego をみつけた可能性は高く、夫たちと Ego は、結婚に至るまで全く知らない同士であったとは考え難い。
- 7 人民解放軍は 1927 年 8 月 1 日に南昌において武装蜂起し、以来各地で蜂起した武装グループが集合離散を繰り返しながら軍事組織を拡大、充実させ、1920 年～30 年代には各地で中国労農紅軍として組織された。
- 8 毎年 7 月中旬から 10 月まで山に登って松茸を採取する。松茸は標高 2600m 前後のところに生えている。採取した松茸を決まった場所に持って行って現金化する。この地域の村民にとって松茸採取で得られる収入は、重要な現金収入である。
- 9 チベット族は亡くなると、標高の高いところでは鳥葬（天葬）を、低いところの水辺では水葬を望み、その次は火葬で、土葬は死因が伝染病などのように思わしくない死にかたをした場合や罪人が死んだときなどで、忌み嫌われている。
- 10 チベット族の兄弟型一妻多夫婚で、夫となる弟が幼く結婚する年齢に達していないときに、数年後結婚生活に加われるようになってから兄たちと一妻多夫婚をする場合がある。その場合でも、兄と妻となる女性が結婚するときには、結婚式に参加する。また、婿養子先がみつからない独身男性やラマ僧であった弟（あるいは兄）が還俗した場合、結婚相手がみつからないときにもすでに結婚している兄（あるいは弟）とその妻の結婚生活に加わって、一妻多夫婚を形成することは稀にある。

参照資料

（表 2）x 村の村民状況

村民	家族数	男女数	世代	家族構成	夫方・妻方居住	婚姻形態
1	5 人	男 3 女 2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
2	3	男 2 女 1	二	核家族	新居住	一夫一婦婚

3	4	男 3 女 1	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
4	5	男 4 女 1	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
5	4	男 1 女 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
6	4	男 1 女 3	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
7	8	男 3 女 5	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
8	10	男 6 女 4	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
9	6	男 3 女 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
10	9	男 5 女 4	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
11	11	男 7 女 4	四	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
12	11	男 5 女 6	四	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
13	8	男 3 女 5	四	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
14	5	男 2 女 3	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
15	8	男 6 女 2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
16	8	男 4 女 4	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
17	10	男 5 女 5	四	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
18	6	男 2 女 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
19	7	男 3 女 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
20	10	男 5 女 5	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
21	6	男 2 女 4	二	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
22	5	男 1 女 4	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
23	6	男 4 女 2	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
24	8	男 4 女 4	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
25	9	男 6 女 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
26	6	男 3 女 3	二	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
27	8	男 5 女 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
28	4	男 2 女 2	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
29	8	男 3 女 5	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
30	7	男 4 女 3	三	直系家族	妻方居住	一夫一婦婚
31	8	男 4 女 4	四	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
32	5	男 1 女 4	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚
33	7	男 4 女 3	三	直系家族	夫方居住	一夫一婦婚

34	3	男 1 女 2	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
35	8	男 4 女 4	三	直系家族	夫方居住	一妻多夫婚
36	4	男 2 女 2	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
37	3	男 0 女 3	三	直系家族	その他	未婚
38	5	男 3 女 2	三	直系家族	その他	一夫一婦婚
39	4	男 1 女 3	二	核家族	新居住	一夫一婦婚
40	4	男 2 女 2	二	核家族	新居住	一夫一婦婚

(出所) 2002 年 5 月の調査による。

参考文献

- 天児慧等編者『現代中国事典』 岩波書店 1999 年
 中華人民共和国婚姻法 1950 年
 中華人民共和国婚姻法 1980 年
 中華人民共和国婚姻法 2001 年
 江守五夫『婚姻の民俗 東アジアの視点から』 吉川弘文館 1998 年
 合田涛『天帝の峰に挑む 東チベットー四川学術調査 3000 キロ』 神戸新聞総合出版センター 1988 年
 川喜田二郎「チベット族の一妻多夫婚(1)ーTorbo 民族誌・その 4」『民族学研究』第 31 巻 1 号、日本民族学会 1966 年
 堅賛才旦「論兄弟型限制性一妻多夫家庭組織与生態動因」西藏研究第 3 期 2000 年
 高発元『雲南民族村寨調査 藏族一中甸尼西郷形朵村』 雲南大学出版 2001 年
 六鹿桂子「チベット族の一妻多夫婚の構造 雲南省迪慶チベット族自治州徳欽県の事例から」『アジア遊学 No.107』 勉誠出版 2008 年
 Nancy E. Levine『The Dynamics of Polyandry Kinship, Domesticity, and Population on the Tibetan Border』 The University of Chicago Press 1988 年
 大塚勝美『婚姻法の研究 上』 有斐閣 1976 年
 陸蓮蒂 江守五夫監訳『婚姻からみた中国少数民族 上』 六興出版 1991 年
 林超民主編『雲南郷土文化叢書・迪慶』 雲南教育出版社 2003 年
 Rolf A. Stein 山口瑞鳳・定方晟訳『チベットの文化 決定版』 岩波書店 (La Civilisation Tibetaine 1962 年) 1987 年
 晋淑蘭等『中国地図集』 中国地図出版社 2003 年
 宋兆麟『共夫制与共妻制』 生活・読書・新知三聯書店上海分店出版 1990 年
 徳欽県志編纂委員会編『徳欽県志』 雲南民族出版社 1997 年
 雲南省中甸県地方志編纂委員会編纂『中甸県志』 雲南民族出版社 1997 年
 Westermarck, Edward 江守五夫訳『人類婚姻史』 社会思想社 1970 年
 山口瑞鳳『チベット 上』 東京大学出版会 1987 年